九州産業大学国際文化学部紀要　第9号 67—83（1997）

# 『ファウスト』脚注の試み（18）

渡　辺　信　生

（1997年5月21日受理）

3332. wär' ich noch so fern —— wenn ich noch so fern wäre. wäre——Konjunktiv II. 現在の仮定。noch so —— たとえどんなに。

3334. Ja —— In der Tat. schon —— even. (Luke). already. (MacNeice). Leib des Herrn —— Das Kruzifix, nicht die Hostie. (Schmidt).

3335. ihn —— 前行の den Leib. indes —— während ich(Faust) hier weile. (Arens).

3336-37. Gar wohl —— Es ist gar wohl so, wie Ihr sagt. jn. um et. beneiden. Zwillingspaar —— 乳房の古代オリエント風の表現。(Endres). Hoheslied Salomos 4, 5：„Deine zwo Brüste sind wie zwei junge Rehzwillinge, die unter den Rosen weiden."による。ゲーテは1775年に Hoheslied を部分的に訳したが，その中のこの箇所は：„Deine beyden Brüste, wie Rehzwillinge die unter Lilien weiden."になっている。(Trunz). Lilien の方が正しいが，ゲーテは依拠していた Luther 訳に従った。(Arens).

主に与えられる接吻のために，あなたが主の体をねたむように，私も（あなたが楽しんだ）あの子の乳房がねたましい。Fragmentに於いてこの場面がまだ„Am Brunnen"のあとに置かれていたときは，これが明白な意味であり，適切なものであった。しかし Faust がまだ Gretchen の所へ行ってはいない今は，一つの単なる可能性に対するねたみから，この明白な意味を歪めることはできないだろう。Vers 3345—47 が，このことに最も明らかに矛盾するだけになおさらのことである。変更以前の筋の経過に言及しているこれらの5句（Vers 3336, 37, 45, 46, 47）は，従って除去した方がベストだろう。(Arens).

3338. Entfliehe —— Mephisto に対する命令法。Kuppler! —— (du) Kuppler! Ihr schimpft. . . —— Wenn Ihr mich schimpft, muß ich lachen. Alexandriner. (Schröer).

3339-40. Der Gott, der —— 先行詞と関係代名詞。Bub —— Buben. (Heffner).

gleich —— sogleich.

3341. Gelegenheit machen —— kuppeln. (Witkowski). この zu 不定句は前行の den edelsten Beruf にかかる。

3338-41. Faust の非難は Mephisto を笑わせるだけである。Mephisto によれば，Kuppelei は最も古くて崇高極まりない職業なのである。なぜなら神は，Adam の肋骨から作った女を，Adam の所へ連れて行き (1. Mose 2, 22)，„Seid fruchtbar und mehret euch" (1. Mose 1, 28) と言って，神自らこの職業を営まれたのだから。(Arens).

3342. Nur fort —— Vgl. 2745, 2752. Jammer —— Unglück. ここでは spöttisch. (Düntzer). es —— 紹介の es.

3342-69. Urfaust では „Dom"のあとの „Nacht"の後半の部分 (Vers 1408—35) に当る。第 1 部では „Nacht"は „Dom"の前に来る。(Arens).

3343. Ihr sollt —— 前行の Nur fort を受けて，あなたは... 行くのですよ。in Eures Liebchens Kammer —— ins Kammer Eures Liebchens (gehen).

3344. Nicht etwa——keineswegs. durchaus nicht. (Fischer). in den Tod (gehen).

3345-65. Faust は次第に高まって行く自責の念にかられながら，過去のことや未来のことをありありと思い浮かべる。だが Faust は決心とは相入れない自責の念によって，決心できないのではない。最初の言葉の背後には，「やむを得ない」という意識がすでに潜んでいるのである。(Arens).

Faust はたとえ Gretchen と一緒にいても，„Verweile doch, du bist so schön" (Vers 1700) と，瞬間に向って自分に言わせるような，真実で永続的な満足を覚えることはないだろうということを，ここですでに言明しているのである。(Endres).

3345-69. これらの Verse は Urfaust では，Faust が Gretchen の所へ行く（これで Valentin が死ぬことになった）途中に，Faust によって語られるという別の関連で書かれている。(Thomas).

3346-47. Laß —— du に対する命令法。Laß mich... erwarmen —— Selbst wenn ich an ihrer Brust liege. 文末の感嘆符は誤解を招く。Gedankenstrich か Kolon を用いるべきところ。例えば現今の次の文と同じ意味：„Laß es 100 Mark kosten, das wäre immer noch nicht teuer." (Arens). Fühl' —— Fühle. nicht immer —— 結果的に肯定になる。(nicht と immer は切れている)。この 1 行は Gretchen に対する Faust の最初の本物の同情。(Arens).

3348ff. Faust は愛の享楽に於いても決して満足し得ないということが，この場に於いて 2 度断呼として強調されている。Vgl. Vers 3249—50, 3345—47. (Heinemann). der Unbehauste —— 形容詞の名詞的用法。次行の Unmensch と共に Flüchtling の言い換え。Unmensch —— der nichts Menschliches mehr an sich hat. (Heyne). ein Mensch, welcher des Menschennamens unwürdig ist, ein ausgearteter, böser, u. insbes. ein liebloser, hartherziger, grausamer Mensch. (Heyse).

3350. Der —— 関係代名詞。先行詞は前行の Unmensch. brausen —— von (stürzenden, auf Hindernisse treffenden, strömenden) Gewässern, Wasserfluten, Meeresbrandung. (Goethe Wb.). Alexandriner. (Schröer).

3350-60. これらの Verse は，抵抗し難い自然の力による破滅を象徴している。(Heffner). Faust は平和なアルプスの小屋を脅かす雷雨のあと，アルプスの山から落下する急流に自分をなぞらえている。(Schröer).

3352. seitwärts —— そばにいて，そのそばで。dumpf —— fühlend, auch noch nicht zur Klarheit durchgedrungen. (Fischer).

3353. Im Hütten —— (Wohnte) im Hütten. Hütten —— Vgl. Vers 2708. (Heffner). 再び垣をめぐらした小さな世界の象徴である。それは蝸牛のように，人が自分の中から作り出した自分の生活空間なのである。(Arens). Margarete の実際の生活ぶりからは無縁のこの逸脱は，このような地形学的表現の比喩的象徴的意味を示唆している。(Schöne).

3354. Beginnen —— Tat, Treiben. (Goethe Wb.). Tätigkeit. (Arens).

3355. Umfangen —— (War) umfangen. umfangen —— tr. 過去分詞。=gebunden. (Fischer). 制限されて（いた)。狭隘な Alpenfeld が Margarete の世界なので，彼女の全生活は家庭で営まれ，制限されている。(Düntzer).

3356. der Gottverhaßte —— verhaßt（憎まれた）の名詞的用法。

3357ff. genug —— genug (damit), Daß. Daß ich. . . —— Daß ich, der Wassersturz, der von Fels zu Felsen brauste, die Felsen faßte und sie zu Trümmern schlug. (Schröer). Wassersturz にたとえながら Faust は話し続ける。(Düntzer).

3359. sie —— Felsen. zu Trümmern schlug —— Vgl. Vers 1608：„Du hast sie zerstört ／ Die schöne Welt!" (Trendelenburg).

3360. Sie —— Margarete. Akk. mußt' —— mußte. Urfaust では wolltest. (Arens). untergraben —— 非分離動詞。

3361. Hölle —— Mephisto. mußtest —— Urfaust では wolltest.

3362. Hilf —— du(Teufel) に対する命令法。jm. et. tun helfen. die Zeit der Angst —— 自分が何を狙っているかを知っていると同時に，それを恐れてもいる Faust の感情の今の状態。(Arens). 二人の平穏無事な共同生活は考えられないということに対する絶望が，今や Faust を完全に悪魔に屈服させる。Faust は自分は Gretchen と共に破滅するだろうと勿論まだ信じてはいる。しかしそうはならない。実際 Kerkerszene で Mephisto は，同罪者 Faust にふさわしいこの場所から，彼を引きさらって行くからである。(Vers 4600ff.). (Endres).

3363. Was muß geschehn —— Was geschehen muß. Was —— 不定関係代名詞。mag's —— mag es. mag=möge. 願望。次行の Mag も同じ。es=Was. gleich —— Urfaust では schnell.

3360-63. このように Faust はすべてを —— 歪曲し弁解しながら —— 運命として，不運として表現する (Margarete の不運は Faust 一人のせいなのである！)。彼はすべてを変えることができるかも知れない自分の意志から語るのではない。市民的な幸福の可能性は，どこまでも閉ざされたままである。Faust は結末を呼び寄せることによって，死についての自分の理想的観念に一致する，一つの感動的な幻想に再度没頭するのである。(Vgl. Vers 1573—78). (Arens).

3 重の mußt', mußtest, muß を Faust は，自分が恋人の部屋に忍び込んで，彼女に加える運命として表現している ——だが Faust は彼女と共に破滅することにはならないだろう。(Schöne).

3364f. Und sie —— Und (mag) sie. sie —— Margarete. 主語。Faust はその本質から Margarete を苦悩の中へ陥れる。この Faust の本質は明白に語られている。だが比喩で。即ち，情け容赦もないように見える自責の念に駆られて語られている。しかしこの自責の念には，極度に興奮した自己感情が鳴り響いており，同時に弁解をも含んでいる。

Faust は自分について，肯定的にも否定的にも，事実に基づいて客観的に語ることができない。その特長を示しているのが，控え目な „ein"を用いる代わりに，„*der* Flüchtling", „*der* Unbehauste", „*der* Unmensch" (三つ合わせると Ahasver，即ち，永遠のユダヤ人の書き換えになり得るだろう) というように，直ちに „der"を用いていることである。なぜなら Faust は，自分を単なる個人と見なすことができず，唯一化身として自己満足しているからである。その限りに於いて彼は，依然として自分が呪った „die hohe Meinung, womit der Geist sich selbst umfängt" (Vers 1591—2) をまだ抱いている。Faust は確固とした存在を

持っていた。そして特定の目的もなしにそれを放棄した（der Flüchtling）．それ以来彼は「定住地」を持たない（der Unbehauste）．彼が或ることから逃げるのか，それとも或ることへ逃げて行くのかさえも定かではない。彼は目的も，安らかな存在も持たない。従って人が人間と呼ぶところのものではない。(Arens).

滝が長い年月をかけてようやく成し遂げたことを，自分のことにしてしまう„Übermensch"の行動意識。あらかじめ Faust に示された方向は深淵の方向である。没落を渇望しながら Faust はそれを肯定する。こうした一切は Faust の Studierzimmer II の場に於ける宣言に一致する：Faust は人間を生に堪え，生に値するようにするすべてのものを呪い，迷いのない生以外のものは，もはや何一つ残さなかったとき，Geisterchor が鳴り響いたのである。(Vgl. Vers 1607—11).

実際 Faust は行為者，犯人として前景にいる。彼は彼女を伴って破滅するつもりである。この破滅の一体感によって，自分の上に崩れ落ちる運命の重荷が相殺されるように彼には思われる。これも幻想である。即ち，彼がブロッケン山で魔女とダンスをしている間に，彼女は底知れぬ悲惨な状態に陥るだろう。彼は生きるだろう。無邪気にも生の力を，従ってまたしても地霊の力を知らずに，ある大きな破滅は避けられないと確信して，彼は悪魔自身よりも上手に，自分自身を欺いてしまったのである。(Arens).

3366. Wie's —— Wie es. es は非人称。感嘆文。Wie's (doch) wieder siedet, . . . ! 英訳では："So much seething and ardor again!" (Atkins). "How it glows again, how it boils again!" (MacNeice).

3367. Geh. . . ein —— du に対する命令法。ein|gehen. tröste も同じ。Urfaust では Gretchen の家の入口のそばで言われた。Fragment 以後は，彼女から遠く離れた森の中で言われる。(Arens). =gehe in die Stadt hinein! (Endres).

これは恐らく最初から聖書の含蓄のある意味で言われたのであろう。Vgl. 1 Mose 6, 4：„. . . denn da die Kinder Gottes zu den Töchtern der Menschen eingingen und sie ihnen Kinder gebaren." Hesekiel 23, 44：„denn man geht zu ihr ein, wie man zu einer Hure eingeht." (Arens).

3368. so ein Köpfchen —— ein so kurzsichtiger, verblendeter Mensch. (Königs). Köpfchen —— Faust.

3369. er —— 前行の Köpfchen. 文法上の性に従えば es であるが，論理上の性（Kopf）に従ったもの。(Trendelenburg). Urfaust では es. gleich —— sogleich. sich³ vor|stellen. かかる人間は出口が見付からないと直ぐ最後だと思ふ。逃げ道がないと直ぐに絶望するの意。(青木)。

3370. Es —— 形式上の主語。wer が真の主語。lebe —— Konjunktiv I. wer に対する要求。wer —— 不定関係代名詞。sich halten=sich verhalten. (Fischer). 勇敢に振舞う者，万歳！ Vers 3370—73 は Fragment で初出。(Schöne).

3371. doch —— 強め。sonst —— gewöhnlich. eingeteufelt —— dem Teufel ähnlich geworden. (Goethe Wb.). Luther はこの合成語の他にまだ „durchteufelt, überteufelt" も用いている。verteufelt は今日でもまだ十分通用している。(Trendelenburg).

3372f. abgeschmackt —— sinnlos od. unsinnig. (Fischer). Vgl. Vers 2387, 2534. ここでは比較級の名詞的用法。次行の Als と結ぶ。find' —— finde. der —— 関係代名詞。先行詞は Teufel. 絶望した状態は，まさしく悪魔が好むところのものである。(Trendelenburg).

## GRETCHENS STUBE

„Wald und Höhle"の場の移動によって，„Gretchens Stube"はそのあとに置かれることになった。Faust の心象風景に対立するものとして，これは極めて適切なことであった。空間的には全く離れてはいないけれども，彼ら 2 人の孤独，即ち，自ら望んだ人々からの別離の中で，類似性と相違点が明らかになる。それと同時に 2 人の愛する者の結合が，引き留め難いものであることが示される。逃走した Faust は Gretchen のもとに戻るだろう，Werther が Lotte のもとに戻るように。けれども Faust はただ自分の欲望や，Mephisto による誘惑に従うのではない。彼は Gretchen の官能への憧れによって引き寄せられるのである。(Arens).

この Margarete の詩行は頻繁に作曲された (Zelter, Schubert, Löwe, Berlioz, Wagner, Verdi 等)。しかし舞台の上ではしばしば説明されているように，勿論歌われたのではなく，糸車の調子のままに語られたと考えねばならない。(Schöne).

揚音で終る Jambus の 2 詩脚から成るこの単純な 4 行詩は，その率直さと短さのうちに，独特の重みを示している。同じ形をした 4 音節の詩行は，意味の重い名詞や動詞に支配された，大抵は短い語群を拾い上げている. . . Gretchen の Lied は，見かけだけは庶民的なこの詩節に，その自然さが韻律上の不規則によって，なお一層説得力を以て作用するあの胸苦しく渇望する調子を与えたのである。 —— Faust と Gretchen は離れている。前の場が Faust のモノロークを伝え，この場が Margarete のモノロークを伝える。Faust のモノロークは素晴しい Blankverse で始まり，Ma-

drigalverse の揺れる構成で終っていて，世界観的，学問的思考の言葉と荒々しい情熱の言葉を，男性的に，気宇壮大に，支離滅裂に混ぜ合わせたものである。Gretchen の言葉は，Lied，つまり Volkslied のように，一貫して一つの協和音を示していて，女性的で，丸やかで，情に満ちている。彼女は Faust のモノロークの結末の言葉を夢にも思わない。彼の方も Gretchen のそれを予想もしていない。だが両方を聞いている聴衆は，これから来たるべきことが起るのを見る。このようにこの二つのモノロークは，ドラマの成り行きを中断したのではなくて，一つの決定的な点へと追い込んだのである。(Trunz).

この場は „Urfaust" と „Fragment" では，ともに „Ein Gartenhäuschen" のあとに置かれている。

3373＋. Gretchen am Spinnrade allein —— ゲーテはいつもの Margarete の代わりに，ここでは „Gretchen" を用いている。(Endres). Frankfurt の Gretchen もゲーテが訪ねて行ったとき，窓辺に坐って糸を紡いでいるところであった。糸を紡ぐのは農民や市民の社会にあっては，19世紀に至るまでどこであろうと，女性の暇な時間を生かす仕事だったということを思い出さねばならない。(Witkowski).

3374. Ruh' —— Ruhe. hin —— weg. übtr. in Verlust geraten, verloren. (Fischer). この詩行でゲーテが，叙情詩人として無比の高みを示している繊細極まりない叙情的 Zwischenspiel が始まる。しかし全体は Lied ではない。万一これが舞台で歌われるとしたら，全く悪趣味な効果を与えよう。これは Gretchen が糸を紡ぎながら語る独白なのである。(Endres).

3376. sie —— 2行上の Meine Ruh'. nimmer —— nie, niemals. (Fischer).

3377. nimmermehr —— nimmer に mehr を附加して強める。＝fortan nicht mehr, niemals mehr. (Fischer).

3378. Wo —— Any place where he is not with me. (Heffner).

3381. vergällt —— vergällen＝durch galle bitter machen, in abstracter bedeutung, widerwärtig machen, verekeln. (Grimm).

3383. verrückt —— 過去分詞。受動形。jm. den Kopf verrücken. 人の頭を狂わせる。(Schöne). thöricht, verwirrt, irrig. (Grimm). verrückt は 2 行下の „zerstückt" と同じく verbal で，adjektivisch ではない。verrücken ＝ verschieben. Vgl. Vers 2811. これ以外の „verrückt" は，„Faust" に於いては常に adjektivisch に用いられている。(Arens). mir ——判断者の Dat.

3382-85. =Mein Kopf ist wirr, mein Denken hat keinen Zusammenhang mehr. (Arens).

3390-3401. 以下に述べられている出来事はすべて，Gretchen の最初の体験を，順番に繰り返しているように思われる。(Arens).

3390. schau' —— schaue. nach et. schauen —— ある物を捜す。今日では nach et. sehen が普通。(Grimm). Nach ihm —— Hoping to see him. (Heffner). Nach ihm nur —— Nur nach ihm. 2行下の nur も同じ。

3391. Zum Fenster hinaus —— 窓から。

3392. geh' —— gehe. nach et. gehen=einer Sache nachgehen. あとを追う，追い求める。(Fischer). Nach ihm —— Hoping to meet him. (Heffner).

3394f. Sein hoher Gang,／Seine edle Gestalt —— Vgl. Vers 2680f.: „Er sah gewiß recht wacker aus／Und ist aus einem edlen Haus." (Arens).

3396f. Seines Mundes Lächeln —— Das Lächeln seines Mundes. Seiner Augen Gewalt —— Die Gewalt seiner Augen. → der Blick (Vgl. Vers 3188ff.). (Arens).

3398f. Und seiner Rede Zauberfluß —— Und Zauberfluß seiner Rede. → die Rede (Vgl. Vers 3211ff., 4487f.). (Arens).

3400. Sein Händedruck —— Vers 3186+, 3194+). (Arens).

3401. Und ach sein Kuß! —— Gartenhäuschen の Kuß. Vgl. Vers 3206. (Arens).

3406f. Busen —— früher auch=Schoß. daher uneigtl.=Inneres. bei Goethe oft geradezu=Herz. (Fischer). der busen wollte ihm springen. (Grimm). Urfaust では „Mein Schoos! Gott! drängt/Sich nach ihm hin." (Senkung のない極めて強い Hebung が3回続く)。この余りにも激しく直接的な詩句は，すでに Fragment でテクストのようにつつましい表現に緩和されている。(Arens).

3408f. dürft' —— dürfte. Konjunktiv II. 実現不可能な願望。Ach dürfte ich —— Ach wäre es mir erlaubt! od. Ach hätte ich Gelegenheit! (Schöne). あとは ihn zu fassen, zu halten und zu küssen. 最後の2節は Fragment と1817年までの Faust I の版では，まだ一つの詩節として印刷されている。(Schöne). 英訳では："Ah, could I seize him/And hold him fast." (MacNeice).

3411. wollt' —— wollte. Konjunktiv II. 外交的用法。(So) wie ich wollte —— 思うがままに。= wie ich möchte. (Arens).

3412f. vergehen —— zu grunde gehen, (bei menschen) sterben. (Grimm). Vergehen sollt'! —— 普通の語順は Sollte (ich) vergehen! sollte —— Kon-

junktiv II. 仮定。この2句の意は＝Und sollte ich auch an seinen Küssen vergehen!　たとえ彼のキスで死ぬとしても。(Buchwald).　Aufschrei：Ach sollte ich doch an seinen Küssen vergehen!　あゝ，彼のキスで死んでもいい。(Trendelenburg).

3374-3413. 不安な気持を韻を踏んだ4詩脚詩句にまとめた場合より，一層強く不安な気持を表現するこの単純な2詩脚詩句によって，即ち，糸を紡ぐときに足で踏む拍子を響かせる，専ら◡—◡—（◡）の形式（27回）によって，このモノロークは，この上なく素朴であると感違いさせる印象を呼び起こす。(他のVersfußは：◡◡—◡—（◡）と，◡—◡◡—（◡）が共に5回。—◡—が2回。◡◡—◡◡—が1回)。実際にはこのモノロークは，Gretchenのこれまでの独白とは本質的に異なっている。これまでの独白では，彼女は他人にでも話しかけるように，ごく自然に（Vers 2783—2804のようにVersの長さが変っている)，一貫して自分の個人的な言語水準に立って，自分に話しかけていた。これに比べるとこのモノロークは，様式化された印象を与える。Vers 3384—85，3396—99のような表現は，Gretchenのこれまでの言語能力を越えている。この点に彼女の本性が経験した感情の高揚がはっきりと現われている。汽車のガッタン，ゴットンという音のように，糸車を踏む音の単調さは，想像と言葉の反復のうちに，機械的に表現されている。先ず第一に不安という根本モティーフの反復のうちに，即ち，第1，4，8節に於て。それからしかし大抵は二つの同じような内容に分かれる節の内部に於ても。(第1，2，3，5，9節)。これらの節の2行目は，常に1行目の変形にすぎない。根本モティーフはそれどころか三重の変形である。以下の反復のOstinatoに注目されたい。第1，4，8節に於ける„mein-"，„nimmer und nimmermehr"，第2節に於ける„ist mir"，第3節に於ける„mein armer"，„ist mir"，第5節に於ける"nach ihm nur —— ich"，第6，7節に於ける„sein-"。第9，10節のように，一つのまとまりを成している第6，7節に於ては，反対に各Versはそれぞれ個有の内容である。限りない欲望の表現へと高まって行く最後の8行には，もはや語の反復は全然ない —— これによって糸車が停止し，Gretchenの最後の言葉が突然止まるということが極めて巧みに暗示されている。(Arens).

## MARTHENS GARTEN

宗教に関するこの対話は，曾てゲーテが書いたうちで最もすばらしいものの一つである。これは Faust 一人の信仰告白ではなくて，ゲーテ自身のそれである。ゲーテは非教義的で，教会には好意的ではなかったけれども，神について極めて崇高な理解と，この上なく深遠な敬虔さを抱いていた。ゲーテ自身の宗教観について，読者が根本的な知識を得ようとすれば，1832年3月11日に，ゲーテがエッカーマンと交した長い対話を読むことがどうしても必要である。だが原則的なことは，この Faust と Gretchen との対話から十分明らかになる。(Endres).

この場はそれぞれ信仰についての対話(Vers 3414—68)，Mephisto についての対話(Vers 3469—3501)，取り決めについての対話（Vers 3502—20）から成り立っている Gretchen と Faust との対話と，エピロークとしての Faust と Mephisto との対話とに分かれる。

Faust はあらかじめ Gretchen のすべての問と発言に全然答えなかったか，或いは答えたとしても彼女を満足させるものではなかったか，どちらかであるけれども，何れにせよ成就する「取り決め」だけが，純粋に筋の上で重要であるにすぎない。この場は最初の 55 Verse と，„katechisiert"（Vers 3523）という言葉に基づいて，しばしば宗教問答の場と呼ばれたが，これは誤解か誇張である。Faust が言っていることは，すべて結合への欲望から出ている。もし Faust があるがままの自分を Margarete に見せるなら，この結合は不可能になるだろう。この場はドラマ全体の中で，愛している二人を，もともと対話ではない対話の中で示し，彼らの精神的道徳的不一致を，どぎついほどあらわに示す機能を持つ。これらはみな Faust の不道徳に起因する。他方 Gretchen はその善良な意志故に，なおさら純粋に見える。この善良な意志は，たとえ彼女が混乱と犯罪に陥ろうとも，上からの „Ist gerettet!" を可能にするものである。—— Gretchen の完全に無条件な献身の用意は，彼女を純粋に官能的な存在に成り下がらせることになるか，それともあらゆる社会的，宗教的条件を越えた存在に高めることになるか，どちらかであろう。両方とも彼女の本性と一致することにはならないだろう。(Arens).

3414. Versprich —— 次行の sag と共に du に対する命令法。対話の中で始められたこの場の発端は，Margarete の冒頭の願いが何に向けられているのか，はっきりしないままである。(Schöne).

Heinrich —— 幾人もの注釈者たちは，Johann が18世紀にはすでに，御者や召使いの名前に成り下がっていたことを強調している。だが Johann はゲーテ自身や，ゲーテの多くの友人の名前でもあった。(Gaier). Gretchen としては，卑屈な „der Herr" (Vers 3073) から，„Ihr" (Vers 3081 以下) と „du" (Vers 3206) を経て，„Heinrich"(このあと Vers 3500 と „Kerkerszene"で 3 回)に至るのは，極く自然な展開である。これに反して Faust が彼女の名前を用いるのは，„Kerker"の中が最初なのである。そこでようやく彼は，恋人に対するありきたりの Kosewort を捨てる。そして愛からというよりはむしろ不安から，Faust は自分が運命になった女性に，初めて名前で呼びかける。(Arens). Was —— 不定関係代名詞。=(Alles) was ich kann, (verspreche ich dir)! Vers 3414—31 はかなり自由な Madrigalverse. Vers 3424f. と 3429 は韻律上不規則。(Ciupke).

3415. wie hast du's mit der Religion —— wie hältst du es mit der Religion? (Schröer). 宗教に就いて如何御考えですか？（青木）。es —— 不定の目的語。ゲーテ自身もこのようによく尋ねられた。例えば Lavater から。(Alt).

3416. herzlich —— äußerst, höchst, sehr. (Grimm).

3417. glaub' —— glaube. davon —— von der Religion. viel von et. halten.

3416-17. Margarete が素朴極まりない言葉で暗示している対立は，信仰を持たない善良な人間という者は，„もともと"あり得ない，告知された真理を信ずる者だけが，„もともと" 善良であり得る，ということである。(Arens).

3418. Laß —— du に対する命令法。das —— 上 3 行のこと。mein Kind —— 若い娘を男や中年の婦人が呼ぶ言葉。その際ある種の自己の優越性や老練さの表現を伴う。或いは父親や母親のような気遣いを伴う。特に恋人が或る種の優しさを以て，男から Kind と呼ばれる。Vgl. Vers 3184. (Grimm).

「あなたは心の底から誠実に永遠の愛を誓うのでしょうね」と Mephioto が不愉快な質問をして，すでに一度 Faust を悩ませたときのように(Vers 3059)，Faust は „Laß das!"と言って退け，Gretchen を注意すべきことに „mein Kind"と呼ぶ。これは「質問してくれるな，質問の意味を君は全然判断できないのだから！」ということなのである。ぎこちなく口に出されたこの質問は，彼女にとってはとても重要であり，彼も正確に理解してはいるのだが，彼にとっては彼女を手に入れる途上では，邪魔なだけなのである。若し彼が彼女の思い通りに正直に答えるなら，自分はキリスト教徒ではないと告白せねばならず，恋人を失うのを覚悟せねばならないのだから。従って彼は自分にだけ重要と思われること，即ち，自分の愛の方に話をそらそうとする。そして感情に身を任せるとしたら —— 若し彼女

の感情が，自分が彼を愛しているように，彼の方でも自分を愛している，と彼女に囁くなら，彼女の感情にそのほか何が必要だろうか？（Arens）. jm. gut sein —— es gut mit jm. meinen. 或る人に好意を持っている。(Heyse).

3419. Lieben＝Geliebten. (Fischer). ließ' —— ließe. Konjunktiv II. 現在の仮定。愛する人々のためなら捨ててもよいのだが。Leib＝Leben. (Fischer). Für meine Lieben —— Urfaust ではまだ „Für die ich liebe" と書かれていて，この方が良かった。„meine Liebe" というのは，家族についてだけ言われるもので，Faust には家族はないし，家族のことなど考えてもいないからである。いずれにせよこれは美しい Phrase にすぎない。Faust は Gretchen を見捨てる。彼の今の言葉に反して，また人類の運命を完全に分かち合う意志や（Vers 1773—75），没落する覚悟（Vers 3365）にも背いて，彼は牢獄の中で Mephisto から別れ，自分に対する信頼を狂乱の女に再び取り戻してやって，彼女と共に死を求める力を見出しはしないのである。(Arens).

3420. Will —— (Ich) will. niemand —— Dat. jm. et. rauben. Alexandriner. (Schröer). ＝er läßt jeden es mit der Religion halten, wie er mag. (Königs). 誰でもその流儀に従って救済されるのを望む，という意味のこの寛容な信仰告白は，Gretchen には何一つ言ったことにはならないし，また何の役にも立たない。こうした寛容さは彼女には，信仰への無関心と思われるだけである。(Arens).

3421. Das ist nicht recht —— 他人の信仰を信ずるがままにして置くのは，十分とは言えない。信仰を自ら持たねばならない。(そして実践せねばならない！) ということ。(Arens). dran —— daran. Kirche か Religion を指しているが，Gretchen にとっては両者は同じである。(Arens).

3422. Muß man? —— Muß man (dran glauben)? この明白な断言に，Faust は弱い „Muß man?" のほかには反論すべき言葉を持たない。逃げ腰のこの問は，「人はキリスト教徒でなければならない，とは思わない」ということを明らかに意味している。しかし Faust を改宗させようとする熱意はあっても，このような会話に於ける訓練の欠如のために，彼女は Faust のこの問を取り上げない。(Arens). auf dich könnte —— auf dich einzuwirken vermöchte. (Schöne). könnte —— Konjunktiv II. 現在の仮定。あとに so wäre ich glücklich を補う。

3423. heil'gen —— heiligen. Sakramente —— 秘蹟。カトリックの教義によれば，Taufe, Firmung, Eucharistie (Messe), Buße (Beichte), Letzter Ölung, Priesterweihe, Ehe. (Schöne).

3424. sie —— 前行の Sakramente. Doch (ehrst du) ohne Verlangen. Margarete

自身の奥行きの深い言葉を繰り返しながら，Faust は実際にはただ「尊重する，尊敬する」と言っているにすぎないということを，彼を気遣っている Margarete は直ちに „Doch ohne Verlangen" と気づく。(Schöne). Faust は „ehren" を Margarete の言う意味ではなく，文字通りに受取ることによって，肯定的な返事をすることができる。こうして彼は言葉を不誠実にもて遊ぶ。(Arens).

3425. 現在完了。

3426-27. darf —— <dürfen. sich erkühnen, erdreisten, wagen. Vers 3432 の darf も同じ。(Goethe Wb.). glaub' —— glaube. Faust は神を信ずると答える代わりに，Gretchen の質問の正当性を疑う反問によって答える。Katechismus の形式にとっては，神は伝承されてきた啓示の対象である。そして神に対しては信仰が要求されるし，また信仰こそがふさわしい。しかしながら Faust にとっては，ほかならぬこの神に対する信仰こそが無意味なことなのである。なぜならどこであれ人間の周囲に，人間の心の中に，存在するすべてのものの中に，はっきりと表われていて感じられるものについて，私は存在すると思うとか，思わないとか，言うことはできないからである。(Arens). 教会に関する宗教上の意味に於ては，Faust は勿論 Ungläubiger である。(Heinemann).

3428. Magst —— (Du) magst. 許可。(聞きたければ) 聞きなさい。fragen のあとに ob sie an Gott glauben を補う。(Düntzer).

3429-30. Spott über den Frager —— 神学者と哲学者は，名前に基づいた (Vers 3457) 返事をするが，この返事は真理を求める誠実な探究者をあざ笑い，本来の神をかくすからである。(Heffner). So —— Dann. それなら。

3431. Mißhör —— du に対する命令法。mißhören —— mißverstehen, falsch verstehen. すでに16世紀に時折り用いられている。ゲーテ以後も H. V. Kleist, Geibel, K. F. Meyer, Bismarck などが用いている。(Fischer). Angesicht —— Angesicht の持主の換喩。(Fischer).

3431-58. ここで Faust は自由韻律の高い調子で語っている。だがそれは賛歌的，熱狂的な詩人の話にふさわしい形式として，Klopstock が Sturm und Drang の詩人たちに模範を示したものである。

内容的にはこの賛歌は，汎神論の教義に触れている。そしてゲーテ自身ここで Faust の口を借りて話題にしているような考えに，好意を抱いていたことは疑いない。„神の名前の濫用" についても，ゲーテは老年に達するまで次のような意見を述べている。「理解することも想像することも全くできない至高の存在が，まるで自分たちと同じものであるかのように，人々は神の名前を取り扱っている，と

ゲーテは言った。そうでなければ彼らは，主なる神とか，愛する神とか，善なる神とか言いはしないだろう。神は人々にとっては，特に毎日神を口にしている僧侶たちにとっては，一つの極まり文句，一つの単なる名前になってしまって，神の名を口にするときには，もう全く何も考えてはいない。だがもし神の偉大さを確信しているのなら，彼らは急に口をつぐんで，畏敬のあまり神の名など呼びはしないだろう。」(Eckermann, 31, 12. 1823).

しかし Faust の告白は，聖書上や宗教上のあらゆる規定から，決して遠く離れたものではない。これらの詩句には，教父たちにまで遡る，さまざまに対立したキリスト教内の議論が濃縮されている。それは理解し難いけれども自らを啓示するもの，名前はないけれども同時にすべての名前であるもの，としての神の表現し難さを回る議論である。(Schöne).

3432-34. ihn —— Gott. nennen —— durch einen Namen sein ganzes Wesen genau bestimmen. (Königs). 人はそもそも „Gott"と敢えて言ってよいものだろうか？ 何かある対象について話すように，神について話してもよいものだろうか？ 人はこの最高の存在を，おとしめたり，歪曲したりすることなしに，そもそも人間の言葉で呼んでよいものだろうか？ これはユダヤ人に Jahweh の名前を言わせない畏怖の念に全く一致する。口に出して言われなかったものだけが，その純粋さと高貴さを保持することができる。Vgl. Vers 1305—07. (Arens).

3432-58. Faust のいわゆる"Credo". これによって韻律は自由なリズムに変る。Vers 3432—36 はまだ押韻している (Vers 3434 は例外)。Vers 3437—58 は押韻していない。(Ciupke).

3433. wer bekennen —— wer (darf) bekennen. この Wer は überflüssig である。(Witkowski).

3434. Ich glaub' ihn —— Ich glaube (an) Gott. einen glauben = an einen glauben. (Arens).

3435. wer empfinden —— wer (darf) empfinden.

3436. sich unterwinden —— sich vermessen, anmaszen, getrauen, wagen, sich erdreisten. (Grimm).

3434-37. 文の構造は：„Wer, der empfindet, darf sich unterwinden (sich trauen) zu sagen：ich glaub' ihn nicht?" (Gaier).

3438f. der Allumfasser, der Allerhalter —— als trostreiche Umschreibung über „Gott." (Fischer). Faust は，眼に見えない神の代わりに用いた概念を彼女に分からせるために，Gretchen の身近にあって，彼女が理解できるものを利用する。

(Trendelenburg).

3440. er —— Der Allumfasser, Der Allerhalter を繰り返したもので不要。

3441. sich selbst —— 神自身。

3438-41. 汎神論的な見解（Gott erhält sich selbst）と，万有在神論的な見解（Gott umfaßt alles und ist durch alles）との結合。神の名を呼ぶことが不可能であることを証明している綿密で逆説的なこの表現の中に，抱括するものと抱括されるもの，支えるものと支えられるもの，といった互いに矛盾してはいるが，神の中で一致せざるを得ないところの，神の二通りの存在の仕方が示されている。(Gaier).

ここはしばしば言われるように，汎神論的な信仰告白ではなく，むしろ万有在神論的な信仰告白である。なぜなら Faust は，すべてを自らの中に抱き，そして支える存在について語っているからである。二つの合成語の „All"は，ゲーテの他の幾つかの All の合成語の場合と同様，alles を意味している。. . . 我々は逆説的にしか神について語ることはできない。神は自らに於て現に働きながら，全体ばかりでなく個々のものを，自然の王国をその秩序のままに，生命あるものを —— 君を，私を —— 生きながら抱いて支えている。これは新プラトン風の考え方である。. . . 少し前に（Vers 3408f.）Gretchen が Faust の Fassen と Halten について純粋に人間的に語ったように，ここで Faust は神の Fassen と Halten について語っている。(Arens).

3444f. steigen. . . herauf —— herauf|steigen.

3446. Schau' —— Schaue. nicht のあとに dies alles を補う。(Schröer). Aug' —— Auge. Aug' in Auge dir＝wenn ich dir ins Auge seh? (Schröer).（神はあらゆるもの抱き，支えているので）Margarete に対する Faust の愛は，神的なものであり，神性の現われであるということを，Faust は彼女に説明する。Faust はそのあと名前も区別ももはや知ろうとはしないので，彼自身神にならねばならない。(Gaier).　dir —— 3回（2行下と4行下）執拗に繰り返されている。(Schmidt).

3447. alles —— dies alles＝du, ich, der Himmel dadroben, die Erde hierunten, ewige Sterne.

3447-50. Faust の話は次第に „alles", „webt", „Geheimnis", „unsichtbar sichtbar"といった，合理的に定義し難い，あいまいな，わけの分からない言葉になって行く。これは Werther の以下の言葉（5月10日）を，より散文的に，あいまいに表現したものである：「. . . 我々を自分の姿に似せて創った全能者の存在を感

じる。永遠の歓喜を味わいながら漂っている我々を抱き，支えてくれる全愛者の息吹きを感じる。そうすると眼の回りがかすんできて，周囲の世界と空が，恋人の姿のように私の心の中に完全に宿る. . . 」(Arens).

3448. =Nach deinem Haupt und Herzen.

3449-50. webt —— 2行上の alles が主語。=wirken, thätig sein. (Grimm). これはゲーテが周知の秘密と呼んでいるものの初期の表現である。このイメージは，恐らく Oetinger の Swedenborg-Buch の読書にさかのぼる。この本の中で Oetinger は，Jakab Böhme の三つの端緒，即ち，活動の根元についての理論を次のように叙述している：「第一の活動の根元は，火の苛烈さの中にあって. . . 永遠なる自然と呼ばれる。(Erdgeist-Aspekt). 第二の活動の根元は. . . 生命の光である. . . (Makrokosmos-Aspekt). 第三の活動の根元は，永遠の根底から生じてくる外面的な所産のあらゆる事物の中にあって，眼に見えるもの (sichtbar) である。そこでは神は勿論除外されているのではなくて，それらのただなかに存在する。そこでは神の眼に見える (sichtbar) 所産は，眼に見えない (unsichtbar) 神性の写しなのである。(Gaier).

3451. Erfüll —— du に対する命令法。davon —— von all dem Geheimnisvollen, das ich angedeutet habe. (Reclam). von dem allen (Vers 3447), was um dich webt und auf dich eindringt. (Arens). es —— dein Herz. so groß es ist —— お前の心が一杯になるまで。(Heffner). =Nimm es in seiner ganzen Größe auf in dein Herz, erfülle es ganz damit. (Arens).

3451-58. Faust の真情の吐露は，朦朧とした深淵を求める欲求を押えることのできないほかならぬドイツ人の心に，どれほど美しく働きかけるとしても，Gretchen の的確な質問に対する口のうまい逃げ口上であり，それどころか，神と信仰を煙に巻いて，彼女が何か言い出す手掛りは何一つ残さない卑劣な詭弁であるということは，見逃すことはできないし，事実また見逃されはしなかった。* こういうわけで二人の間には真実は何一つ存在しない。*Witkowski：「狼狽した言い逃れ」Buchwald：「Faust が今や狙っている全く別の目的に役立つ狼狽した話しぶり」Rickert：「恋人と話し合って，自分の信仰について折り合いをつけたいという欲求は，Faust には露ほどもない」(Arens).

3451f. 神，天，人間の領域について暗示的な質問をすることによって，Faust は魔術的な世界像の三つの主領域を引用したばかりでなく，それらを直接 Gretchen の経験に関係づけた。その結果彼女は，自分が神によって抱かれ，支えられていると感じることになる。自分の身近な現実 (dadroben, hierunten Vers 3442—43)

を，永遠であると決めて考えることになる。Faust の愛の中に „ewiges Geheimnis" (Vers 3449) が姿を現わすのを見ることになる。つまり Faust は彼女を魔術的な陶酔の中へ引きずり込もうと努めたのである。想像力が高まる最後の一歩は，今や „Gefühl"ということになる。(Gaier).

3452. wenn —— 次行の dann と呼応する。

3453. Nenn —— Nenn(e). du に対する命令法。es —— 前行の selig な感情。

3453-58. „Sturm und Drang"そのものの雰囲気。言葉は感情の充溢を捕えるには不十分。Klopstock：„Du, den Worte nicht nennen"；Herder：„Wie nenn' ich dich, du Unnennbarer?"；Lavater：„Oder nenn's, beschreib's wie du willst. . . Nenn's Innigkeit, Herzlichkeit；nenn's Glaube, Liebe, Hoffnung. . . Die Göttlichkeit aller Dinge muß gefühlt werden". (Alt).

3454-56. Nenn's —— Nenn es. 前行と同じ。Faust の言葉の中で力を込めた所は，結局この箇所で Spondeen によって表現されている。(Ciupke).

Nĕnn's Glūck! Hērz! Līebĕ! Gōtt!
Īch hābĕ kēinĕn Nāmĕn
Dăfūr! Gĕfūhl īst ālles.

3455. Ich habe keinen Namen —— イスラム教に於ても神性（Allah）は，定義する名前を持たない。„Allah il Allah"＝Gott ist Gott. この言葉はイスラム教の神のイメージの基礎をなすものである。孔子も神についてのあらゆる議論を，天という名称に限定して，それ以上の思弁をすべて不可能な事柄として禁止している。(Endres).

3456. Gefühl —— Kestner は Wetzler のゲーテについて次のように報告している：「彼は真理を得ようと努める。だが真理の論証よりも，真理の感情の方を高く評価する。」(Grimm).

3457f. Name ist Schall —— nichts weiter als Schall, der nichts sagt. (Schröer). umnebeln —— untr. in Dunkel einhüllen und dadurch unkennbar machen. (Fischer). Himmelsglut —— Akk. himmlische, beseligende glut des herzens. (Grimm). ＝Name ist Schall und Rauch, der Himmelsglut umnebelt.

名前は本質的なものではない。それどころかしばしば真の存在を隠す。Vgl. Shakespeare, Romeo und Julia II, 2：„Was ist ein Name? Was uns Rose heißt, Hieß es auch anders, würde lieblich duften." 名前とは何だろう？ 我々がバラと呼んでいる花は，たとえ別の名前であっても，甘く香ることだろう。(Königs).